北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第15号

平成20年 6月

目　　次

1	着任のご挨拶	長尾　義信	2
2	日本語弁論大会	松岡　晶子	2
3	現在の大学生	Andi Nofita	4
4	看護師・介護福祉師導入にむけて	上杉　祐子	6
5	スラウェシに於ける領事館の推移と戦前（昭和 14 年頃）の日本人会の状況	松田　　勲	7
6	モアイ像のルーツか？「巨大石人パリンド」の謎によせて	羽根井義博	13
7	エチオピアについて	石野　　赫	19
8	その後の NPO 法人手火山について	川口　博康	22
9	飛魚（トビウオ）	長崎　節夫	26
	編集後記		32

ご 挨 拶

在マカッサル日本国総領事館
副領事　長尾善信

はじめまして。マカッサル総領事館の長尾善信と申します。4 月 18 日に、佐藤副領事の後任として赴任いたしました。インドネシアは、初めてで日々新たな発見があり、楽しく生活しております。皆様とは、戸籍・国籍、証明書作成、在留届、在外選挙登録等でお会いしたり、お話しする機会もあるかと存じますが、その際はよろしくお願いいたします。

日本語弁論大会

副領事　松岡晶子

在マカッサル日本総領事館は、国際交流基金との共催で、5月24日(土)、マナド市内サヒッド・カワヌワ・ホテルにて、2008年度日本語弁論大会スラウェシ予選を開催しました。本年度が50周年の記念の年にあたるため、通常より大規模に、300人の大ホールを貸し切って行われました。大会の冒頭、日本インドネシア国交樹立50周年記念 DVD「Benang Merah～赤い糸～」が上映されました。その後、マナド国立大学日本語学科の学生による日本の踊りの披露に引き続き、全スラウェシから集まった日本語学習者10名による弁論発表が行われました。

審査員は、北スラウェシ日本人会代表幹事の平野健氏、マカッサルより出張した総領事館の松岡副領事、JOCV 日本語隊員としてマナドで活動中の東田明子さん及びその後任の太原徹雄さんの4名でした。司会は、マナド国立大学のフランキー・ナヨアン先生が務めました。

厳正な審査の結果、全国大会への出場権を得る栄えある第一位は、南スラウェシ州マカッサルの国立ハサヌディン大学日本文学科の生徒、アンディ・ノフィタさん。弁論のタイトルは「現代の大学生」。デモや喧嘩ばかりして、勉学に集中しないマカッサルの学生について、痛烈に批判しました。第二位は、マナド外語短期大学の学生、グラディス・カリギスさんの「ねずみ」。自分の干支であるねずみ年について、そして、マナド人のねずみを食用する習慣についてスピーチしました。第三位はやはりハサヌディン大学日本文学科の学生、アクマル・ジャヤ君による「借金の習慣」。「インドネシア人の学生は、頻繁に借金をする習慣があり、とても悪いことである。」としながらも、「そうした学生の一人は自分です。」と自虐的にスピーチし、会場の大爆笑を誘いました。

審査員長努めた平野氏は、審査員講評の中で、「もう少し、内容に工夫が欲しかった。」とコメントしました。また主賓を務めたマナド国立大学のヨッピー・リアンド副学長

は、「兼ねてより、スラウェシと日本の関係を非常に長く、深い。本日の弁論大会をはじめとする、50周年の様々な文化行事を通じて、日インドネシアの友好関係のさらなる発展が望まれる。」と挨拶しました。

優勝したアンディ・ノフィタさんら、7月にジャカルタで行われる、全国大会に出場します。

現在の大学生

Andi Nofita

おはようございます。
皆さん　きょうは　現在の大学生　について　考えてみたいと思います。

中学校のとき、大学生に関心しました。なぜかというと、そのとき、私の学校では、教育実習生が、多かったです。その大学生は、私たちに、おしえてくれていました。頭もよかったし、頭の回転も速かったし、それに、行儀もよかったと思いました。それから、いつも、優しくて、ふくそうもきちんとしていて、とっても、すばらしく見えました。

しかし、今、私が大学生になってみると、昔感じていた大学生のイメージは変わりました。現在、大学生は、知識人のように見えず、不良青年のように見えると思います。
みなさん、最近、義務を自覚しない大学生が増え始めました。大学生たちは、暇なとき、勉強せずに、遊ぶことが一番好きだと思います。

たとえば、ほかの大学で、サッカーの試合のとき、相手のグループに、まけただけで、そのグループは、ぼうどうをおこしました。ほかのたとえば、デモをしているとき、大学生たちは、何か必要でないことをして、タイヤを燃やしながらデモをしています。こんなことをしたら、知識人のようにみえません。

私はデモがいけないことだとは思いません。しかし、デモするときは、ほかの人に迷惑をかけないようにするべきです。
もし、デモをするなら、よい方法で、デモをしましょう。

みなさん、この間、大学生の喧嘩があって、おたがいに、いしをなげ合いました。数人の犠牲者が出て、それから、大学の設備も壊されて、教室のガラスも、割られてしまいました。ついに、学長は、講義を中断しなければなりませんでした。その喧嘩の理由は、女性についてだったのです。これが大学生のすべきことですか。
私は同じ大学生として恥ずかしいです。そのとき、日本の大学生がいたので、「日本では、大学生の喧嘩がありますか。」と聞きました。彼らは「ううん、大学で喧嘩する学生はいないよ。」とわらいながら、こたえてくれました。
私は、そのとき、とっても恥ずかしかったです。みなさん、このことが、もう一度、起きた場合に、一番被害を受ける人々は私たち大学生自身です。

皆さんは、もう大学生ですから、ほかの人を困らせるようなことをしないようにしましょ

う。そして、もっと、自分に責任を持ちましょう。たとえば、教室で、講義がわからないとき、だまっていないで、せんせいに、聞きましょう。
それから、ひまなとき、友達と勉強会などを、したほうがいいと思います。

大学生みんなは、将来のために、これからも、よく勉強して、ほかの人に、むやみやたらに、扇動されないようにしまあよう。大学生たちは、頭もよいので、自分で、自分に、役に立つことをして、もっともっと、がんばったほうがいいと思います。
これからは、自分でよく考え、自分の意見をいい、せきにんをもってふるまったほうがいいと思います。

どうも、ありがとう、ございました。

看護師・介護福祉士導入に向けて

ビーナヌサンタラ大学
日本語講師　上杉祐子

現在、私は大学のIT(情報技術)専攻卒業生をITエンジニアとして日本派遣するための日本語研修をしています。日本は少子高齢化ということだけでなく、企業のITエンジニアが不足していることから、外国人技術者、たとえばインド人、中国人、韓国人などが日本で働く姿が見られました。インドネシア人技術者はほとんどいませんでした。2006年よりジャカルタで始まったプログラムで、第1期生13人がすでに日本で活躍しており、第2期生も今年5月末から少人数ですが日本へ渡航しています。その研修生たちに「インドネシアから何を輸出していますか」と問うと、「人です。私たちです」で答えるのですが、高度な技術をもった人材を受け入れるという日本は、決して労働力不足だけでインドネシア人技術者を求めているわけではないと思いますが、日本語を一生懸命教えて、日本で仕事ができるように養成している立場としては、苦笑するしかありません。

さて、昨年8月に署名した日本インドネシア経済連携協定(EPA)に基づき、看護師400人、介護福祉士600人の計1000人を受け入れるそうですが、初年度の今年は、それぞれ半数が渡日する予定です。看護師はインドネシアの看護師資格を持ち、2年以上の実務経験があること。一方、介護福祉士は大卒で半年程度の介護研修を修了しているか、インドネシアの看護師資格を持っていることなどが要件となる、という報道がありました。フィリピンが2006年にEPAに署名はしたものの、国内法が批准できずに足踏みして間に、インドネシアからあっという間に看護師、介護福祉士が日本に渡り、医療・福祉分野で初の本格的な外国人労働力の受け入れが実現することになるわけです。第1陣は8月上旬までに渡日し、半年間、日本語研修などを受け、看護師は3年以内、介護福祉士は4年以内に、働きながら日本の国家資格取得を目指します。取得できなければ帰国、国家試験に通れば日本人と同じ条件で働き続けられます。

ここでまず問題になるのが日本語力であることが予想されます。フィリピン人導入のために、日本語教育機関が準備した指導内容をそのままインドネシア人に適応して始められることになりそうです。しかし、IT技術者に1300－1500時間で日本語能力試験2級レベルを習得させて、日本へ行くことがどれだけハードであるか知っているだけに、看護師、介護福祉士の道も遠いと思います。それに仕事の性格上、看護師は生命に関わることだし、介護福祉士はお年寄りとコミュニケーションをとることが要求されます。インドネシア人の陽気でまわりの人をなごませる性格を活用する前に、「日本語」の壁が立ちはだかっています。

しかし、世の中はすでに先の動きを読んで動いている人がいます。私が以前教えていたミナハサ日本語研修センターPPBJはインドネシア人日本語講師だけで、4月から再開しています。その柱となるコースは、トモホンの看護学校を卒業して看護師資格を持つ若い女性たちの渡日前研修で、やがて日本へ行って、老人のための施設で働くことになるということです。まだ、彼女たちに会っていないので実際のところはわかりませんが、希望をもって日本へ行くために勉強しているのですから、どうか日本で働くことができることを願っています。

スラウェシに於ける領事館の推移と戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

松田 勲

目次

まえがき
1. 領事館の推移(戦前、戦後)
2. 戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

← 左の写真 昭和16年3月23日
在マカッサル大日本帝国領事館開館記念

まえがき

取り敢えず入手できました資料を基に標題について箇条書きに纏めてみました。顧みますと、昭和14年という年は、5月中旬に起きた満州国境のノモンハン事件の結末が影響し、またその前年の「東亜新秩序」の発表などとあいまって、やがて南進政策が企画されようとしていた時代でした。

ところが、資料によりますとセレベス島にはもう既にこの年、かなり多数の日本人が在留しております。ということはこれら日本人在留者は、自ら求めてセレベス島に渡って行ったことになりますが、はるか海を越えてゆくことをもたらした、惹きつける何かがこの島にはあったということでしょう。たとえば、北部セレベス島モゴンドウでコーヒーその他有用栽培物を栽培する農園が日本人によって経営されていましたが、これを可能ならしめた何かがあったと推測されます。マカッサルなど他の地区でも同様のことが言いうると思われます。

他方、これら日本人在留者を受け入れた現地側の実情はどんな状況だったのでしょうか。この点は大いに知りたい所ですが未だ資料にお目にかかっておりません。更に遡って草分け的な先人たちの状況、これらの方々を含め日本人在留者の残した足跡、遺産、そしてこれらが現地の社会にどう融和し受け継がれているか等調べる価値のある課題が多いかと思われます。

1. 領事館の推移

(戦前)

(1)在メナド領事館

昭和12年12月18日に開設。バタヴィア、スラバヤ、メダンに次いで第4番目の領事館。昭

の事情については資料見当たらず。この領事館が開設される以前は、当地域は在スラバヤ領事館が担当。

(2)在マカッサル領事館

昭和16年2月22日に開設。第5番目の領事館。従ってスラウェシ(当時はセレベス)には二つの領事館が開設されたことになる。しかし同年12月8日には閉鎖。この領事館が開設される以前は、スラバヤが当地域を管轄し、メナド領事館はその開設後もこの地域を管轄していなかった。

(3)他の地域の領事館

バタヴィア、スラバヤ、メダンの状況は次のとおり

(イ)在バタヴィア領事館 ー 明治42年2月14日開設、昭和16年12月8日閉鎖。

(ロ)在スラバヤ領事館 ー大正9年3月13日開設。昭和16年12月8日閉鎖。

(ハ)在メダン領事館 ー 昭和3年3月26日開設。昭和16年12月8日閉鎖

(戦後)

次に戦後の推移に関しインドネシア全体について時系列的に記すと次のとおり

(1) 昭和26年11月22日ジャカルタ在外事務所開設

(2) 昭和27年8月5日在外事務所が廃止され、在ジャカルタ総領事館開設

(3) 昭和27年8月5日スラバヤ領事館再開

(4) 昭和33年4月15日日本国とインドネシア共和国との平和条約及び日本国とインドネシア共和国との間の賠償協定が発効。同日、在インドネシア大使館開設

(5) 昭和35年12月15日在メダン領事館再開

(6) 昭和52年1月10日在ウジュン・パンダン総領事館開設(平成13年4月1日名称が在マカッサル総領事館に変わる。)

2. 戦前(昭和14年頃)の日本人会の状況

(1) スラウェシ(セレベス)島に於ける最初の日本人会は、大正4年に創立された「メナド」日本人会。次いで大正7年にマカッサルに「マカッサー」日本人会が創立され、更に大正9年に「ブートン」日本人会(ブートン島)、昭和8年に「モゴンドウ州」日本人会が

創立された。なお、「モゴンドウ州」日本人会は「メナド」日本人会から分離して創立されたもの。

(2) 他の近辺の島(現在のマルク州内外)では、メナド領事館の管轄内に「テルナテ」日本人会(昭和6年8月創立、会員24名)、「アンボイナ」日本人会(大正8年5月13日創立、会員30名)、「ドボ」日本人会(明治38年5月27日創立、会員76名)が存在した。

(3) 「メナド」日本人会

(イ) 会員数　186名(メナドおよび附近の在留邦人)

(ロ) 会の目的　会員相互の交誼を深め、共同利益の増進を計る

(ハ) 登記　昭和10年12月7日付け蘭印政府に登記完了。(蘭文会則テキスト別添)

(ニ) 活動・業績

○ 昭和12年12月9日政府の補助で小学校を開校。仮校舎を建設。(下記(註)参照)

○ 邦人発展上の諸般について斡旋援助―即ち内外官公署との交渉、重要諸事項等の通達、入国手続き、居住券書き換え、納税、警察事故等の弁明、和解、諸願届の代行、会報、ニュース等の発行、名士から講演を受けるなど。

○ 台湾、沖縄、南洋等より漂着漁船乗組員の保護、送還、船体処分、帰船費の立替、救助費の支払いなど。過去10隻の実績あり。

○ 居住券の権利喪失せる者相当数あり、会の斡旋援助により過半数は権利復活を見る。

(註)「メナド」日本人小学校の推移

(a) 昭和10年度―生徒数、第一学年9名、第二学年2名、第三学年4名、計15名

(b) 昭和11年度――第一学年6名、第二学年5名、第三学年2名、計14名

(c) 昭和12年度――第一学年1名、第二学年11名、第三学年4名、第四学年2名、第五学年2名、計20名

(d) 昭和13年度――第一学年2名、第二学年3名、第三学年11名、第四学年2名、第五学年4名、第六学年1名、計14名

(e) 昭和11年8月内地より全科目担当教員1名(准教員)が着任。音楽・衛生

担当の女性教員(無給)との二人体制。年度は9月1日より翌年3月31日まで。授業日数は168日。

(4) 「マカッサー」日本人会

(イ)所在地　セレベス島マカッサー市

(ロ)創立　大正7年5月

(ハ)会員数　124名

(ニ)会長　村田益太郎

(ホ)その他　教育基金を設けているので何らかの在留子弟に対する教育を行っていたと思われる。それ以外については資料がなく不明。

(5) 「ブートン」日本人会

(イ)所在地　セレベス島ブートン島

(ロ)創立　大正9年9月1日

(ハ)会員数　12名

(ニ)会長　尾田勝蔵

(ホ)その他については、資料なく不明。

(6) 「モゴンドウ州」日本人会

(イ)　所在地　蘭領東印度セレベス島モゴンドウ州モダヤ

(ロ)　創立　昭和8年5月1日。従来「メナド」日本人会モダヤ支部として存続してきた、しかしメナドとは極めて遠隔セル地理的関係その他特殊事情に鑑み別個独立セル日本人会を組織。

(ハ)　会員数　正会員14名、準会員38名

(ニ)　会の目的　邦人相互の親睦・共栄を計り、併せて当地方官憲及び一般外国人との和親を増進し、以って帝國臣民としての品位と信用を向上セシム。

日本人会ではないが邦人実業団体等として、「メナド」日本人商業協会、モダヤ邦人農園組合、沖縄県人会(メナド)、蘭印産業組合(アルー島「ドボ」)が存在した。

(7) 「メナド」日本人商業協会

(イ)創立　昭和9年3月

(ロ)会員数　7社

(ハ)会の目的　会員の強調連絡を図り、共同利益を増進セシム

(二)会長　セレベス興業合資会社 長野 智

(ホ)活動　創立後、蘭印経済省、監督官庁の公認するところとなる。

商業に関し、主要事項は、欧州人および支那人商業協会と同様電信・書信を受け、邦商の利益に供す。

理事のうち1名は、メナド税関より対日輸入商品に対する評価委員として選任せらる。

蘭印日本人商業協会聯合会に所属し、同会より諸法令、商業・事業関連事項統計類の訳文送付を受け、全会員に配布している。

(8) モダヤ邦人農園組合

(イ)創立　昭和11年2月1日

(ロ)組合員数　9名　モゴンドウ州モダヤ又はモダヤ附近在留邦人として農園を経営する者を以って組織す。

(ハ)活動、事業、業績

- 珈琲その他有用栽培物の栽培
- パラ、丁子、カポック、トバ、水陸稲その他の栽培試験
- 収穫物の共同販売、日用品の共同購入
- 組合資金の積み立て、借り入れ、又は組合員への融資等、業績未だ顕著ならざれども将来これらに付き充実の要あるべし
- 積年生産物価不況の為、資金積み立て容易ならず、従って組合の維持運用に困難なるも、出来る限り互いに精神的協力を計り、目的達成に努めつつある

(9) 沖縄県人会

(イ)所在地　メナド(メナド、トンセラ、ビートン)

(ロ)創立　昭和12年1月3日

(ハ)会員数　85名

(二)会の目的　会員相互の交誼を厚くし、共同して利益を計る。

(ホ)活動・業績　昭和13年来「ビートン」における沖縄県人子女の為、不完全ながらも日本人小学校の授くべき教育を施している。

(10) 蘭印産業組合

(イ)所在地　蘭領東印度「アルー」島「ドボ」

(ロ)創立　昭和11年7月1日

(ハ)組合員数　邦人7名、土人(？)2名、計9名

(ニ)組合長　浦中 久吉

(ホ)目的 産業に必要なる物品の購入・漁獲物の共同販売

バタヴィア日本人会　会員 292名 大正2年創立

スラバヤ日本人会　会員 479名 大正15年創立

スマトラ日本人会(メダン)　会員211名 明治30年創立

新嘉坡日本人会　会員787名 大正4年創立

マニラ日本人会　会員2, 325名 大正13年創立

マカッサル	83名
マナド	17名
ビトウン	10名
クンダリ	24名
ソロン	13名
ジャカルタ	8,102名
スラバヤ	550名
インドネシア全体	11, 221名

注:この資料は外務省外交資料館に保存されている多数の資料その他を元に取り纏めたたものです。

写真出典: 昭和50年9月1日発行の図南春秋 第10号 中居台介「 マカッサルの先駆者たち」より

掲載:2008-5-9
一部修正:2008-5-13

Index　Back　Next

「モアイ像のルーツか？巨大石人パリンドの謎」に寄せて

羽根井　義博

本会員の石野さんから、２００７年１２月１日ＴＢＳの「世界ふしぎ発見！」で、ビトンが放映される旨の電話がありました。早速テレビのチャンネルを合わせました。番組では、ビトンの鰹節工場がクイズとして出題されました。

話題はスラウェシ島中部の巨大石像の話でした。不思議な石像だったので、ご報告いたします。

スラウェシ島には、あの有名なイースター島のモアイ像のルーツか？と言われている謎の巨大石造パリンドがあるということで、番組が始まります。

パリンドは、タナトラジャの近くに位置する、ロレ・リンドゥー国立公園内にあります。その国立公園の広さは東京都位だそうです。パリンドにたどり着く途中にも、様々な石像を紹介していました。それは、特にここというわけではなく、田んぼや野原などにありました。人型や動物型など、どれも表情豊かで、どことなくほのぼのとしていました。由来など解からないそうですが、基本的には先祖が、今の自分たちを見守ってくれている事の象徴ではないか、との事でした。

さて、問題のパリンドですが、写真を載せておきます。かなり大きなもので、表面はすべすべに磨かれているそうです。

果たして、パリンドはモアイ像のルーツなのでしょうか。という問題提起で番組は終わります。

さて、パリンドがモアイ像のルーツだとすると、スラウェシ島から、遥か彼方のイースター島まで、太平洋を巨石文化が伝わって行ったことになります。

その広大な太平洋には、ニューギニア島やソロモン諸島、フジィー諸島が属するメラネシアの島々、パラオやマーシャル諸島、マリアナ諸島の属するミクロネシアの島々及び、ハワイ諸島、イースター島、ニュージーランドを結ぶ三角形の中にあるポリネシアの島々、が点在しています。

なんとこの地域は、先史時代から文化的交流があったそうです。オーストロネシア系といわれる民族が、長い年月をかけて原住民と接触しながら広がっていったと考えられています。キャプテンクックのようなヨーロッパ人がこの地に到着した時点で、すでに相互に似通った言語を用いていたそうです。

太平洋の島々に人々が交流するには、遠洋航海の技術が必須です。つまり、

驚くべきことに、このような太古の昔、コンパスや六文儀、正確な時計も用いず、何千キロもの遠洋航海が可能であったことになります。

インドネシア　スラウェシ島においては、２００７年７月に日本人の山本良行さんと、インドネシア人の冒険家３名が、西スラウェシ州の伝統船サンデックを復元し、古代と同じ航法で黒潮街道を縦断しました。それは、２ヶ月と１０日をかけて名古屋港に到着するという、約５０００ｋｍの大航海でした。

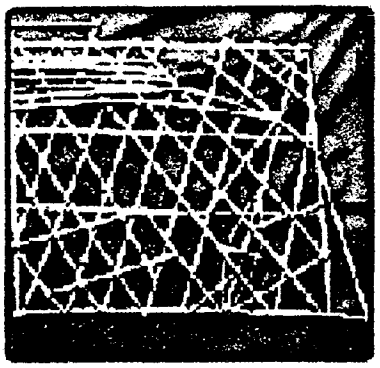
サンデックは、西スラウェシ州のマンダール民族に伝わる、アウトリガーを左右両方に二本装備した古代の航海帆走カヌーです。実際に航海したサンデックは、スシロ大統領に「Sandeq Explorer」と名付けられた、長さ１６．７ｍ、幅１．２７ｍの大きさの船でした。

途中、沖縄沖で転覆するという危険な出来事もあったそうですが、山本さんはじめ、インドネシア冒険家の勇気と技術でこの大航海は、成功しました。

Sandeq Explorer

ミクロネシア人は太古から、高度な航海技術を持っていたことが知られています。離島の影響で、波が変化することを知っていて、押し寄せる波のパターンで、水平線で見えない離島の位置を特定したと言われています。そして、そ

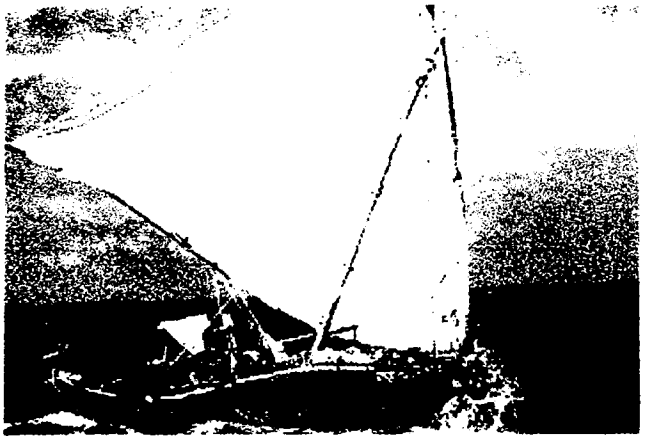
の位置を、棒とコヤス貝で表した「スティックチャート」と呼ばれる海図を作っていました。



スティックチャート

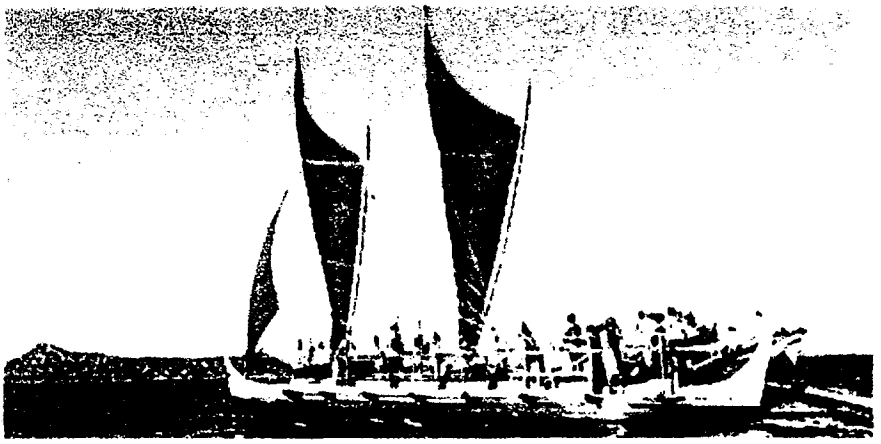
航海の技術者は、スティックチャートと星、波、潮流、風、雲、鳥などを情報源として、海の動きを読み、航海していたそうです。当時、航海に用いられた船は、シングルアウトリガーの帆走カヌーでした。

1975年沖縄海洋博に、ミクロネシアのサタワル島から「チェチニメニ号」が、古代航法でやってきました。



チェチェメニ号

ポリネシアではその昔、南米から人々が殖民して現在のポリネシア人になったという説がありました。しかし、１９７５年ハワイで建造された、双胴の帆走航海カヌー「ホクレア号」の検証航海により、今日では、東南アジアから人々がやって来たと言うことが定説になっています。



ホクレア号

古代ポリネシア人たちは、古代の航法で数千キロメートルに及ぶ遠洋航海を行っていたと考えられています。

古代ポリネシアの航海カヌーは「ホクレア号」のような二つのカヌー船体を並べ、その間にデッキを設置し、帆を張った双胴帆走船と、ミクロネシア人が用いていたような、シングルアウトリガー帆走船の双方を使っていたようです。

「ホクレア号」は、今年ハワイから日本への実験航海も成功させました。日本でも「ホクレア」と同じ形式の航海カヌー「カマクラ」を建造し、航海を続けるそうです。「カマ・ク・ラ」とは、ポリネシア語で「昇る太陽の子ども」という意味もあるそうです。

メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアにおいて、船の構造上の違いは多少あるものの、基本的には、アウトリガーの帆走カヌーを用い、高度な航海技術を駆使していたことは共通しています。

インドネシアからハワイ諸島、イースター島にかけて、無数に点在する離島において、太古の昔から、自然の力と人間の力だけの帆走カヌーで、大海原を駆け巡った一大海洋文化圏が、存在したことが考えられます。

そして人々は、その文化圏で、東南アジアからポリネシアへと拡散して行っ

たという、とてもスケールが大きな時代だったと想像できます。

そして、スラウェシ島からイースター島へと巨石文化も伝わり、パリンドは、モアイ像のルーツであると、十分考えられるのではないでしょうか。

太古の航海士は、風や海流を利用して航海することを「海を歩く」と言ったそうです。人間と自然とが一体化した、すばらしい表現だと思います。

地球温暖化が叫ばれている昨今、太古の人々の自然に対する考え方をもう一度見直してみることが必要な時期が来ているのではないでしょうか。

エチオピアについて

石野　赫　記

ビトンを離れて、既に３年が過ぎました。通算しますと３０年ほど関わったインドネシアは第二の故郷で、再訪したい気持ちは大なのですが、とある事からＮＧＯに加わり今アフリカのエチオピアの仕事をしています。

自分が目下参画しているこのＮＧＯは、外務省管轄下にあり、エチオピアを中心とした民間外交・文化交流を促進することに携わっています。しかし、皆様にとってこの国は遠い存在であり、あの小造りだが威厳のあるハイレ・セラシエ皇帝とマラソン選手アベベは知っていても、この国についてはあまりご存知ないのではないかと思います。

そこで、この国の伝説の世界から現代へと箇条書きにして、この国を逐次紹介して参りたいと思います。中には「へー」というような反応も出るのではないかと思います。では、お楽しみに、、、、、

☆この国にも建国伝説があります。その伝説によれば、この国は３０００年以上の歴史を持ち、シバの女王とイスラエルのソロモン王との間の息子メネリクＩ世が初代皇帝であったと言われています。そして彼がイスラエルより「契約の箱」アークを持ち帰ったとされ、今は聖地アクスムの教会収められていると言われています。このソロモン王朝は、最後のハイレ・セレシエ皇帝に至るまで、２７３代続いたとされています。（ハイレ・セレシエ皇帝は、１９７５年時の左翼政権により暗殺され、これにより日本の皇室が世界で一番古い Royal Family となりました。）

☆聖書に４０回以上その名が記されています。（聖書に出てくる「クシ」なる地名はエチオピアのことです。現在、別名「アビシニア」とも言われています。）

☆世界人類発祥の地といわれています。エチオピアで発見された人骨化石「アウストラルピテクスアファ＝ルーシー」は３２０万年前、「ラミダス」は４４０万年前、「イダルツ」は１６万年前と言われています。従って、考古学者は、エチオピアは一つの流れの中で人類成長の歴史を辿れる国と言っています。

☆人種は「セム系」と言われ、いわゆる Black African とは違っています。このせいか、付き合っていますと、かなり自意識の高い国民との感を受けます。

☆コーヒーの原産地です。「コーヒー」の名前は、エチオピアのコーヒー産地カファによるもので、日本の茶会に似た「コーヒー・セレモニー」を開いて、コーヒーを皆で会話を楽しみつつ飲む習慣が数百年続いています。コーヒーの粒

を煎ることから始めますので、一杯目を飲むまでに１時間はかかるそうです。（コーヒー輸出が、この国の輸出総額の７０％を占めています。）

☆アフリカ唯一、標記文字を持っています（アムハラ語と言います）。聖書は古いエチオピア語であるギーズ語で書かれています。

☆この国は、一時イタリアのムッソリーニ軍の侵略を受けたことはありますが、珍しく植民地化されなかった国です。皇帝を抱く国で、植民地化されなかった国は、このエチオピア、タイと日本の三カ国のみだそうです。

☆首都アジスアベバには、国連アフリカ本部、アフリカ連合本部（AU）があり、世界で３番目に大使館の多い国です。

☆８０以上の民族がそれぞれの言語・文化・伝統・生活習慣を持ち続けてきた国ですが、内乱はあまりなく平和共存を続けています。

☆ナイル川（青ナイル）の水源となるタナ湖からの水の供給量はナイル川流量の８０％と言われています。

☆正式国名は「エチオピア連邦民主共和国」で、皇族が１９７０年代に絶えたものですから連邦共和制をとっています。

☆現在人口は７７００万人で、国土面積は、日本の３倍です。

☆首都アジスアベバの意味は「美しい花」です。（今、エチオピア・ローズの日本への輸出が盛んになりつつあります。）標高が約２千メーターで、昼は暑いそうですが、夜はジャンパーが必要だそうです。

☆宗教には、コプト派キリスト教（５０％）、イスラーム教（３０％）、ユダヤ教、土着宗教があります。しかし、宗教間の諍いは無いそうです。

☆ユリウス暦を使い、１年が１３ヶ月となっています。１２月まで毎月が３０日、１３月目で総計３６５日ないし３６６日との調整を行います。従って、１３月目は１週間とはない月となります。

☆西暦９月１１日が、エチオピア暦１月１日で、この日が正月です。西暦２００７年がエチオピア暦２０００年にあたり、昨年の西暦で２００７年の９月には盛大なお祭りをしました。

☆右の写真は、エチオピア人によるフォークダンスのお披露目で、２０００年のお祭り時のものです。

☆かようにして歴史もあり深い文化を持っている事から、世界遺産も８つを数えます。以下に列挙します。

1．古都アクスムの中心に聳え立つ一枚岩のオベリスク(33M)
2．ゴンダール地方の城群（17 世紀建設）
3．アジスアベバ近郊テイャの石碑群（14 世紀頃建設）
4．ラリベラ地方の一枚岩教会群（12 世紀頃建設）
5．エチオピア西南部の少数民族群
6．アワシ川下流化石群
7．セミエン国立公園
8．ハラル地域のモスク群

時間がありましたら是非エチオピアを訪ねてみて下さい。絶対に感動なさること、間違いありません。可愛い子供たちがお迎えしてくれますよ。

この二人、可愛く、いい顔をしていますね！

Please visit Ethiopia!

長崎様

お元気にご活躍とお察し致します。
その後のＮＰＯ法人手火山について何か書きなさいとのお電話を頂きながらすっかり遅れてしまい申し訳ありません。大急ぎで以下にまとめます。

「その後のＮＰＯ法人手火山について」

川口　博康

昨年１１月に静岡県から認証して頂き直ぐに法人の手続きをして今に至っているわけですが、本年度４月から何とか事業計画にそった活動に取り組んでおります。５／末の会員は６５名、今年の目標を１００名においています。
３月に水産庁関係の「むらの伝統文化顕彰」に応募したところ、都市農山漁村交流活性化機構理事長賞を受賞しました。伝統的鰹節製造方法であります「手火山式」を保存し、これを使ってブルーツーリズムに繋げ「町おこし」にまでもっていこうという主旨です。

５／２５に「鰹節ｉｎ御前崎」と題して鰹節に関するセミナーをスタートさせました。
講演をお二人の先生にお願いしました。内容は以下の通りです。全部で８回のシリーズです。藤林先生はビトンにもフィールドワークで調査した経験がおありの方です。

① 講座目標

- **a. 日本が誇る伝統的食文化である鰹節のすばらしさを理解するため**
- **b. 御前崎に残る伝統的鰹節製法「手火山」で鰹節を作る体験実習**
- **c. この講座を通して、ブルーツーリズム・スローフーズ・食育について理解する**
- ***d. 社員研修***

② 講座内容・スケジュール

回　数	日　時　　場　所(予定)	内　　容
第一回	場　所　：　なぶら館 （御前崎観光物産会館） 実施日　．　5 月 25 日(日) 時　間　　9 時から 12 時	1. オリエンテーション 特別講演 2. 和田　俊　東京海洋大学教授 「鰹節と健康」 3. 藤林　泰　埼玉大学経済学部助教 「日本とアジア・太平洋をつなぐ鰹節ネットワーク」 4. 初かつおの試食会(交流会)

タイトル:「手火山　てびやま」
応募団体名:特定非営利活動法人手火山
市町村名:静岡県御前崎市

■ 活動の概要

手火山とは、焙乾(直火による燻し)という鰹節作りで、自分の勘と経験によって、薪の種類、薪の焚き方、時間、空気量、燻臭、湿度、色などを見極めながら、総合的に調整して作り上げるものである。機械を使わず、電気も使わないことも大きな特徴である。

江戸時代に、みかんの肥料となるカツオの荒粕を船に積み紀州へ売りに行く途中に出会った、鰹節の優れた技術を持つ土佐の鰹節職人、山際初次郎を御前崎に招き、当時最新の鰹節の製造方法だった「手火山」という焙煎方法を伝授してもらうことから始まる。以来、改善を加えながら、手火山方式による鰹節作りが町の基幹産業となり、昭和25年頃には、鰹節製造業者は50軒にもなっていた。

しかし昭和35年頃から時代の流れが大量生産、工業化、効率化に変わり、手火山方式はこの流れに対応できず、現在は2軒を残すのみで、当事者も高齢となり、後継者も決まらないまま、手火山方式の存続が危ぶまれている状況であった。

特定非営利活動法人手火山は、地元有志が集まり、手火山方式の技術の継承を中心に、地域の水産業の発展とブルーツーリズムの実施し、これをまちおこし、地域の活性化につなげることを目的に、3年間の準備期間を経て、平成19年に設立。手火山を使った工場での体験学習の実施、手火山の技術の継承と施設の保存等を目指し活動を行っている。

今後は、NPO 会員、または一般に広く呼びかけ、現在、手火山を経営する2人から技術を伝授し、後継者養成を行うこととしている。

第７回むらの伝統文化顕彰の選賞について

農山漁村の自然と歴史から生まれ、暮らしの中で受け継がれてきた風俗・慣習、芸能・行事そして技は、地域らしさを象徴しており、その地域に住む人々の誇りと愛着を持ってきた貴重な文化資源です。
「むらの伝統文化顕彰」は、農山漁村の伝統文化の価値を理解し、その維持・継承・活用において積極的に取り組んでいる方々、また農山漁村の営みや暮らしにかかわる貴重な技術を活かし今に伝えている方々などを顕彰し、それらを農山漁村の魅力ある資源として広く全国に情報発信することを目的に実施しているものです。
本年度 83 団体から応募があり、書類審査を踏まえて、1 月 28 日（月曜日）に開催された審査会の結果、以下のとおり選賞団体が決定いたしましたので、お知らせします。

選賞団体

1.　農林水産大臣賞
香川県小豆郡土庄町「肥土山（ひとやま）農村歌舞伎保存会」

2.　農林水産省農村振興局長賞
北海道函館市「函館だんづけ保存会」
栃木県那須塩原市「那須苗取（なすなえと）り田植唄（たうえうた）保存会」

3.　**（財）都市農山漁村交流活性化機構理事長賞**
静岡県御前崎市「特定非営利活動法人手火山（てびやま）」
愛知県北設楽郡東栄町「東栄町 11 花祭り保存会」
滋賀県近江八幡市「沖島町自治会」

選考委員

守友裕一	座長	宇都宮大学農学部教授
天野忠良		長崎国際大学非常勤講師
石田憲治		農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所農村総合研究部都市農村交流研究チーム長
篠原徹		人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館研究部教授
平野啓子		語り部、大阪芸術大学放送学科教授

■ 講評(評価のポイント)

土佐の職人から持ち込まれ、一時は町の基幹産業だった手火山方式の鰹節作りを、地域特有の資源として捉え、単に保存・伝承するだけでなく、体験学習やブルーツーリズムへの発展など、実践的・経済的活動につなげて、多角的に地域の活性化を図ろうとしている点が評価された。まだ活動期間は短いが、焙乾による鰹節作りの技術は、全国的にも減少しており、ここでの保存・伝承は今後、非常に重要であるという点から、高く評価した。

＊　ＮＰＯ法人になったのは昨年の１１月ですが、このような活動は地域の有志の皆さんと

４年位前からやっていました。

会員を募集しています。(詳しくは手火山ネットから)

特定非営利活動法人（ＮＰＯ）手火山

手火山ネット　ＨＰアドレス

http://www.npo-tebiyama.org/

住所　　：〒437－1621

御前崎市御前崎4883

代表者　：　川口 博康

TEL&FAX：0548-63-2327

E-Mail　：hiro77@qj9.so-net.ne.jp

飛魚（トビウオ）

長崎節夫

前回は空飛ぶ婆さんのことを書きましたが、今回は空を飛ぶ魚の話です。

一昔前のある年（1999）にアンボン島へ数回かよいました。アンボン島のクリスチャンとモスリムが血みどろの報復合戦を繰り広げている最中でした。アンボン島行きの目的はアンボン島の漁師が獲ってきたまぐろを買い付けることです。

ビトゥンを出発してマルク海をほぼ南南東の方向に一日半（36 時間）航海して、アンボン島の北西岸（つまりビトゥンに対面する場所）にあるアシルル（旧名ヌサテラ）に到着します。アシルルは人口 2,000 人ほどのイスラム漁民の村です。山が海岸近くまで迫っていて、海岸沿いのせまい平地にびっしりという感じで民家がかたまっています。こちらは海から海岸近くまで接近して錨をおろし、カヌーの漁師が獲ってきたまぐろ（ほとんどキハダマグロ）を買い取るのですが、その話はまたの機会にゆずって、今回はトビウオの話です。

アシルルの海岸から北北西の方向、（すなわちビトゥンの方向）を眺めると、正面から右手にかけてセラム島が眺められます。セラム島はかなりの大島ですから、アシルルの海岸から見て視界に入るのは島の西部の一部分だけで、島の東部は遠方にかすんで消えています。また、正面から左側にはブル島がみえます。ブル島の東端とセラム島の西端にはさまれた海峡がマルク海とバンダ海を仕切る関門で、小島がふたつ、関守のように並んでいます。この関門からアシルルにいたるまでの海はトビウオの集合場所のようで、この海域を航行中はほとんど絶え間なくトビウオの飛翔を見ることができます。このトビウオを狙ってマグロがやって来る、またそのマグロをねらって漁師のカヌーが走り回り、漁師に釣られたマグロをねらって買取り業者が行く、という図式になるわけです。

温帯から熱帯にかけての海ではどこでもトビウオの飛翔を見ることができますが、私がこれまでに見た範囲では、この海域のトビウオが最も濃密に群れていると思いました。

トビウオは空をとべるといってもやたらに飛び回っているわけではなくて、外敵におそわれたりする場合に「逃げる」ために空中にとびだすわけです。船が接近してきた場合も「ヤバイ」ということでパッと飛び出す。ですからほとんどのトビウオは船から遠ざかるように、船から放射状に飛び去ります。しかしときには、とくに夜間など、逃げる方向をまちがえて船にとびこんでくるあわてものもいます。

海面すれすれに飛行するトビウオを見て誰もが気にすることは、やはり飛行距離の事ではないかと思います。雑誌のコラムなどでトビウオについての記述を見ることがあって、それにはたいてい、「トビウオの飛行距離の世界記録は 0000 年どこそこの海で記録されたのが０００メートル」などとありますが、これは眉につばをつけたほうがよいと思う。大体どの記述にも測定方法が書いてありません。巻尺ではかったのか、測距儀で図ったのか、

スピードガンで測ったのか。測定方法を示さないと公認記録にはならないのではないか。私が思うに、トビウオの飛行距離について公式の測定方法を定めて日本記録や世界記録を決定することは、現在の技術水準では無理ではなかろうか。

前置きはこれくらいにして本題にはいります。

1. トビウオの体型・形状

「空を飛ぶもの」といえば、まず飛行機です。飛行機もトビウオも「空を飛ぶ」という共通の機能をもって生まれているので、その形状や性能には相似点がいくつか見られます。形の方からみますと

トビウオにも翼（主翼、水平尾翼、垂直尾翼）があります。トビウオの場合、胸鰭が主翼、腹鰭が水平尾翼、尾鰭が垂直尾翼に相当します。胸鰭と腹鰭は、水中を泳いでいるときはトビウオの左右の体側にそってたたまれていますが、いざ飛行となって空中に飛び出す瞬間にパッとひらきます。飛行が終わって海中にもどるとまた後方におりたたむ。つまりトビウオの翼は主翼・水平尾翼ともに「可変後退翼」です。現在、一部の軍用機では可変後退翼をもっているのもあるようですが、一般の旅客機ではまだそこまで進化していません。

飛行機の垂直尾翼に相当するのは「尾鰭」です。トビウオの尾鰭はかつお・まぐろ類の尾鰭と同じように深く切れ込んだ形をしていますが、尾びれ下部の面積が上部のほぼ 2 倍と大きくなっているのが特徴です。これはトビウオが空中にとびだす際の「踏み切り」の役割をこの「尾鰭の下半分」が担っているためです。トビウオの空中での推進方式は、プロペラ式やジェット式ではなく、グライダー方式です。（厳密にいえばグライダーともすこしちがう。陸上競技の走り幅跳び、あるいはスキーのジャンプにより近いか）。トビウオは、空中に飛び出して飛行するためには海中で（自力で）助走し、そのいきおいで水面に浮上して滑走し、空中に飛び出します。助走の初期に海中でスピードをつける役割を担っているのが尾鰭と、尾鰭を動かす（左右に激しく振る）ための筋肉です。そして空中に飛び出す際に最後に水面を蹴るのは尾鰭の下部先端ということになります。そのために尾鰭の、とくに下部が発達したということでしょう。

飛行機の主翼に相当するのは「胸鰭」です。その役割は飛行機の主翼とまったく同じで、空中で姿勢を安定させること、そして墜落しないように体をささえる（揚力を得る）ことでしょう。この目的にそうために、トビウオの胸鰭はほかの魚のそれより（身体に対比して）面積が大きくなっています。

機体重量と主翼の面積の割合、これが飛行機の性能に大きな意味をもちます。機体重量（キログラム）÷主翼面積（㎡）を翼面荷重といいます。主翼の 1 ㎡が受け持っている（支えている）飛行機の重量は何ｋｇか。海軍のゼロ戦は１０５ｋｇであったそうです。（ゼロ戦の総重量は約 2,300 kg）。

アンボンのトビウオの翼面荷重は何グラムか。サンプル 5 尾を測定したところ、平均値は 1.07 g/c ㎡と出ました。これを 1 平方メートルあたりになおすと、10. 7Kg、トビウオの翼面荷重はゼロ戦の約 10 分の 1 になります。

次にトビウオの胴体について。

トビウオの胴体を真二つに切ると、その断面は図のようになっています。上部（背中）の方はふつうの魚と同じですが下部（腹）は船の船底部のかたちになっています。飛行機にもこのような断面図があります。救難用などに使われる飛行艇の胴体断面です。

トビウオのジャンプの手順は、まず水中で尾鰭を急激にふって推力をつけ、その勢いで水面に浮き上がり、さらに水面を滑走しながら速度をあげ、最高速度に達したところで主翼・尾翼をひろげて離水します。離水速度は 20m/秒（時速約 70 キロ）に達するそうです。離水まえの水面滑走をおこなうために、トビウオの下腹部は高速艇の船底のようになってしまったということでしょう。

2. トビウオの飛行性能

飛行距離

トビウオといえば真っ先に気になることは、前記のとおり飛行距離です。最長不倒距離はどれくらいになるでしょうか。飛行距離を決定する条件としては、助走のスピード、トビウオの体重、海上の風向・風速などが考えられます。助走のスピードはそのときのトビウオの気分次第です。「船がやってきた。ヤバイからちょいと逃げておこう」というのと、カツオやシイラに追われて必死に逃げるのとではスピードも違うのではなかろうか。またなんとなく遊び半分で飛び出すこともあるかも知れません。仲間同士で打ち合わせして飛び出すこともあるでしょうか。

体重は重いほど惰力がつきますから遠くまで飛べる理屈になりますが、これは胸鰭の面積や筋力などのバランスの問題でしょう。メタボではマズイと思いますが、トビウオの世界にメタボはいないと思います。ということで幼魚より成魚のほうが遠くまでとべるようです。船からの目視では距離 30m前後というのが最も多く見られます。50m を超えたと思われるのもかなりあります。

何の目印もない海面を船から遠ざかるように飛ぶものですから、船上からの目視での測定はかなりおおざっぱになるしかありません。一般的に飛行距離は大型のものほど長い。当然ながらそのときの風向・風力にも左右されるでしょう。

飛行距離に関連して言えば、ときには操縦士の訓練飛行のような「タッチ・アンド・ゴー」を行う姿もみられます。海面に着水する寸前、尾鰭の先端が海面にふれた瞬間に激しく左右にふって推力をつけ、再び飛びあがります。胴体は海面に触れない。触れるのは尾鰭の下部先端だけです。遠くから見ていると継続した飛行を続けているようにみえますが、

気をつけて見ると海面に波紋が残っていてそれとわかります。この「タッチ・アンド・ゴー」を3回4回くりかえすとかなり遠くまで飛んでしまいます。

針路と高度の変更

トビウオは飛行中に針路を変えたり高度をかえたりできます。
波の高い日など、当初の飛行高度よりも高い波には直進してつっこんでしまうのが普通ですが、なかには波の嶺を乗り越えのりこえ、サーカス飛行をやらかすのもいます。

針路変更も、飛行機のように向きをかえる側の翼を下げ、曲線をえがいて針路をかえます。しかし向きをかえた時点で推力を失って着水となるのが普通です。

高度や針路の変更がどのようなメカニズムで行われているのか、視覚と胸鰭が連動しているかと思いますがよくわかりません。

編隊飛行

トビウオは編隊飛行もおこないます。

成魚の場合は小隊編成または中隊編成が普通ですが、幼魚の飛行は大隊編成、ときには数千尾の編隊というのもあります。同時に飛び上がって同針路でとび、同時に着水。海中で飛行前のブリーフィングでもやっているのでしょうか。

3　トビウオのたまご

鮨の「軍艦巻き」、佃煮の「子持ち昆布」、塩辛の「こがねいか」など、さまざまな形で日常的にトビウオのたまごを目にすることができます。私たちが商品として目にするトビウオのたまごは一粒ずつばらけた状態になっていますが、産みつけられるときの卵は一本の糸（粘着糸）に数珠繋ぎになっています。トビウオは産卵の際、この粘着糸を海面に漂っている海藻や流木あるいは漁具などにこすりつけます。この習性を利用して東南アジア各地の漁師たちはヤシの葉などを数珠つなぎにして海面にうかべ、これに卵を産み付けてもらって横取りします。ということですがインドネシアの海ではどこでこの漁法をやっているのでしょうか。私はまだみていません。（マカッサルの水産物問屋でトビコを売っていると聞いたことはある）。私の経験では、インド洋でまぐろ延縄の操業中に、浮き玉（漁具の部品）にびっしり卵を産みつけられることがしばしばありました。これを浮き球からひきはがして手のひらでまるめるとゴムまりのようになります。

とれたての卵を商品として仕上げるためには、卵そのものを粘着糸からはぎとらねばなりませんが、どうやって剥ぎ取っているだろうか。

4．トビウオと昭和天皇

以下の話は「週刊文春」平成17年10月20日号に掲載されていた、動物学者の竹内久美

子さんの文章からの引用ですが、私はこの話をガキのころに父親から聞いた記憶があるし、また別の書物でも読んでいます。昔の日本人にはよく知られた話ではないかと思います。

大正10年（1921）3月3日、当時皇太子であった昭和天皇は、はじめてのヨーロッパ訪問に出発しました。今なら政府専用機でご出発というところでしょうが、昔はスケールが違います。お召し艦「香取」、供奉艦「鹿島」、軍艦2隻を連ねての外国訪問です。（このときの香取の艦長は沖縄出身の海軍大佐（のちに少将）漢那憲和、と父親から聞いた）。

軍艦2隻は沖縄御訪問を経て、3月7日未明には宮古島沖にさしかかります。事件はここでおきました。突然、海面にトビウオの群れがあらわれて、そのうちの3尾は香取、3尾は鹿島の甲板にとびこみました。古来船乗りは魚が船にとびこんでくることを吉兆として喜びます。香取の艦長漢那大佐はさっそく東宮侍従長の入江為守に一首乞うた。

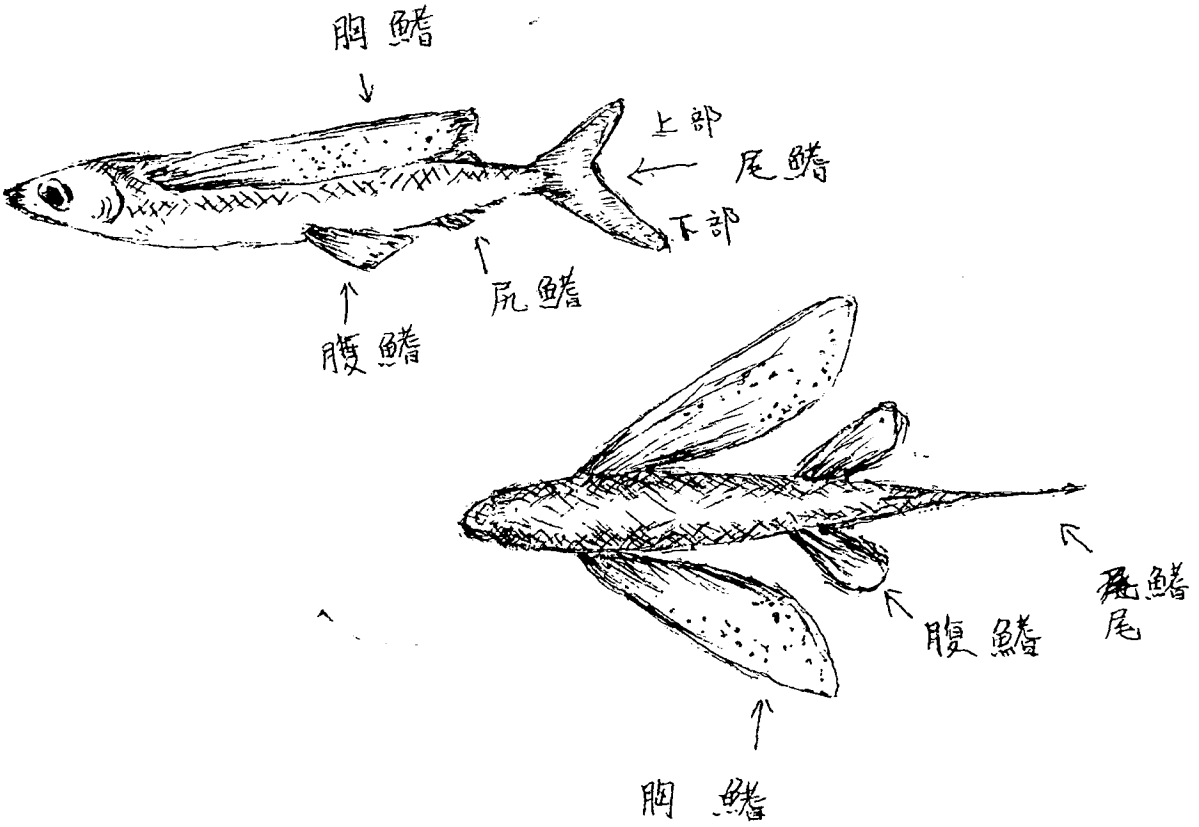
「幸おおきしるしをみせてこのあさげ魚飛びのぼる香取鹿島に」が侍従長の歌だそうです。ちなみに、このときの香取艦の甲板は、海面上6メートルであったそうです。

ここで話はガクンと落ちますが、私の航海中の楽しみのひとつは、早朝、だれよりも早く甲板を巡視することです。第一の目的は夜のうちに船にとびこんできて、デッキにのびているトビウオを拾うことです。海上がシケ模様のときほど見つける確率は高く、4，5尾も拾うことがあります。拾ったトビウオは賄い室に直行となります。トビウオは味のよい魚です。焼いてよし、から揚げでもよし。

「幸おおきしるしをみせてこの朝餉、鍋にとびいるとびうおさんば」。

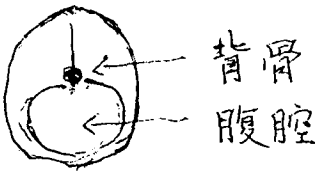
終り

アヤトビ



（半開き状態）

胴体中央部断面



編集後記

平成20年もあっという間に半ばまできました。日本ではこれから本格的な夏を迎える季節になりますが、われらがスラウェシ島はいつでも夏です。

最近になって気がついたことですが、現地の皆さんが「時間」についてほとんど気をつかわないのは、季節の変化がないことも大いに関係しているのではないでしょうか。ベソック（明日）とはあしただけでなく、あさっても一週間後も一ヶ月後もすべてベソックのようです。クマリン（昨日）とはきのうだけでなく一週間前も一ヶ月前もすべてクマリンです。時間の観念の違いに慣れきれずにとまどったり失敗したりしていますが、これに慣れたらちょっとまずいのではないか、と気張ったりもしています。

季節の変化がないといっても、じつは雨季と乾季の年にふたつの季節はあります。我々は四季の移ろいを季節の変化と感じているわけですが、こちらの皆さんは雨の時期と雨の無い時季に季節の移ろいを感じているかと思います。そうなるとやはり感覚の波長が合わないということになりますが、むつかしいことは考えずにうまく波長をあわせていけたらいいのではないか。

会報「タルシウス」も第15号となりますが年2刊のペースを崩さずにやっていこうと思っています。

羽根井さんの「モアイ像のルーツか、・・」　は前号掲載の予定でしたが手違いがあって今号掲載となりました。私が昔むかしカツオ釣りに行ったフィジー諸島でも役所の壁に大きなカヌーの絵があって「われわれの祖先はこのカヌーでインドネシア方面から渡ってきた」と説明書きがありました。大昔の人々は私たちがいま思っている以上に太平洋をダイナミックに動いていた、ということですね。

羽根井さんが太平洋なら石野さんはインド洋をわたってエチオピアの紹介です。石野さんは現在、日本エチオピア協会の事務局長をつとめています。ご多忙にかかわらず、次号以降もいっぱい書いてくれるそうです。ありがたいことです。

去った5月27日、メナードのHASANUDIN KAWANUA HOTELでスラウエシ地区日本語弁論大会がひらかれました。総領事館の松岡さんのご報告と優勝したAndi Nofita　君のスピーチ原稿をいただきました。

日本語教育に関しては今回も上杉先生のリポートをいただきました。トモホンの日本語学校も一時閉鎖されていましたが、体勢を立て直して再開されたようです。日本の労働事情もからんで日本語教育をめぐる動きが活発なようですが、それなりに問題もいっぱいあるようです。青木さんをはじめ日本語教育関係のみなさまにはますますのご健闘を期待したいと思います。

松田さんから（川口さんをとおして）ありがたい原稿をいただきました。これからもよろしくお願いいたします。

川口さんが「ＮＰＯ手火山」を立ち上げたことは前号で紹介しましたが、はやくもその活動がみとめられて授賞の栄誉にかがやきました。今後の一層のご活躍を期待したいとおもいます。

ビトゥンの長崎さんは空をとぶモノにこだわっている様子ですが大丈夫でしょうか。

メナードの玲子さんと勝見さんは次号でブナケンとダイビングについてそれぞれリポートを提出するそうです。乞うご期待！

「タルシウス」今号の表紙は、羽根井さんの筆によるタルシウスです。ありがとうございました。

（長崎）